講演

「ベルリンは音楽都市だったか？」

2019 年 10 月 19 日（土）13：30－15：30

立命館大学衣笠キャンパス
平井嘉一郎記念図書館 1F カンファレンス・ルーム

主催：立命館大学国際言語文化研究所 重点プロジェクト
　　風景・空間の表象、記憶、歴史 研究会
共催：科学研究費助成事業基盤研究(C)（課題番号 17K02302）
　　「ドイツ・モダニズムの黎明期―作品・理論・パトロンの美学・歴史研究」

岡田暁生氏　京都大学人文科学研究所教授

専門は西洋音楽史。主要な著書に『オペラの運命』(2001 中公新書：サントリー学芸賞受賞)、『ピアニストになりたい！』(2009 春秋社：芸術選奨新人賞)、『音楽の聴き方』(2009 中公新書：吉田秀和賞受賞)、『楽都ウィーンの光と影』(2012 小学館)、『すごいジャズには理由がある』(2014 アルテスパブリッシング)、『音楽と出会う』(2019 世界思想社)。

講演要旨：ヨーロッパの音楽史の中でベルリンは、とりわけドイツ統一以前のプロイセン時代、必ずしも「音楽都市」であったとはいえない。プロイセン官僚主義は、ウィーンやヴェネチアの音楽を育んだ享楽的なミリューの対極にあっただろう。音楽都市としてのベルリンの台頭／胎動は世紀転換期に始まり、第一次大戦後の 1920 年代に大衆文化と結びついてヨーロッパの中心に躍り出る。当日はこの世紀転換期から 1920 年代にかけてのベルリンの音楽模様を概観したい。